救命の連鎖
命を救った5分間

皆野町スポーツ公園で10月19日(日)に開催された「皆野町秋季ソフトテニス大会」。大会に参加していた小林富子さんが、ベンチで休憩中に突然倒れ、心肺停止の状態に…。

緊迫した現場の様子を関係者の証言で振り返り、ＡＥＤの普及と救命処置の重要性を考えます。

◆突然の出来事

「倒れた日のことは全然覚えていないんです。ただ、後から聞いた話では、朝から少し胸が痛いと周りのかたに言っていたようです。」

テニスにグラウンドゴルフ、三味線と、バイタリティに溢れ、健康そのものだった小林富子さんを襲った突然の出来事。

試合の休憩中、ベンチからぐずぐずと崩れ落ち、顔色は徐々に青ざめていく…。

そんな富子さんを救ったのは、ある二人の勇気ある、冷静な行動でした。

◆救いたい ただそれだけでした

「富子さんが倒れた！との声が聞こえたんです。試合中だったんですが、ラケットを放り出して富子さんのもとへ向かいました。」そう振り返るのは、原重太郎さんと持田幸雄さん。

原　重太郎さん

持田　幸雄さん

原さんは勤務先の安全衛生委員などを務め、これまで多くの救命講習を受けていました。また、持田さんは元消防士。現場での救急の経験もありました。

「ただ、講習会では人形相手。実際の緊急事態に一瞬とまどいましたが、自分がやるしかないと勇気を出して対応しました。」と原さん。富子さんを救いたい、その気持ちが二人を突き動かしました。

◆二人の連係プレー

持田さんは、周囲の一人に119番通報を指示。指令課につながると電話をかわり、状況を説明しました。

一方、原さんは富子さんの状態を確認。脈も呼吸もない、いわゆる心肺停止の状態で、顔にはチアノーゼ※の症状が。

すぐさま二人による救命処置が始まりました。

「それまで二人は会話もそれほど交わしたことは無かったんです。でも、あの時は、あうんの呼吸で二人の役割分担が決まりました。私が人工呼吸を行い、原さんが心臓マッサージを行いました。」と語る持田さん。

心臓が停止した人が5分間放置された場合、その後の手当で助かる確率は25％。119番通報から救急車が到着するまでの平均時間が約6分。その場にいる人が行う救命処置がいかに重要なものであるかがわかります。

※チアノーゼ　血液中の酸素が欠乏した状態。唇や皮膚が青黒くなる。

◆懸命の救命処置

「救急車が到着するまで何分かかったかはよくわかりません。ただそれまでの間、富子さんが助かってほしいとの一念で、懸命に心肺蘇生を続けました。」と原さん。

救急隊が到着すると、すぐさまＡＥＤ（自動体外式除細動器）が富子さんに装着され、電気ショックが行われました。1回、2回、それでも正常な脈に戻りません。3回目の電気ショックを行うべきかどうか…。判断に迷った救急隊員は皆野病院の医師に電話で確認。医師の指示により3回目のショックが実施さ